

# カントの観念論論駁

村 山 保 史

カントが観念論を論駁していると言えば、違和感を感じる向きもあるかもしれない。カントをいわゆるドイツ観念論の代表的な人物と考える者も多いであろうからである。もちろん、カントが観念論者であるという人口に膾炙したテーズ自体に誤りはない。カント自身、自らが超越論的な観念論者であると言っている。カントは確かに観念論者なのである。しかし同時に、カントは間違いなく観念論の論駁者でもある。逆説的な言い方をすれば、カントは観念論を論駁する観念論者なのである。本論では、カントによる観念論論駁の議論を考察し、それを通じてカント自身の超越論的観念論の一端をも明らかにできればと思う。

## I. 準備的考察

### A. 観念論とは何か

#### 1. 非妥当性

カントの観念論論駁についての最もまとまった議論が見られるのは、『純粹理性批判』第二版（一七八七年）、「経験的思考一般の要請」に付加された、文字通り「観念論論駁」においてである。それゆえカントによる観念論論駁の議論を吟味しようとするわれわれもまた、何を措いても「観念論論駁」の議論を考察すべきである。しかし「観念論論駁」は、『純粹理性批判』第二版の「純粹理性の誤謬推理について」（以下、「誤謬推理」）における「4」の議

論や『純粹理性批判』第一版（一七八一年）の「誤謬推理」における「第四誤謬推理」と密接な関係をもつ議論であり、さらに遡れば、前批判期の末期に相当する一七七〇年代後半から一七八〇年頃の思想と推定される『形而上学講義』の「合理的心理学」第一章、心 (Seele) の自発性についての議論を批判的に継承した議論でもある。したがって「観念論論駁」の十分な理解のためには、時代を追って、i. 『形而上学講義』の「合理的心理学」第一章における心の自発性についての議論、ii. 『純粹理性批判』第一版の「誤謬推理」における「第四誤謬推理」の議論、iii. 同じく第二版の「誤謬推理」における「4」の議論についての準備的な考察が必要となる。

しかしさらにこれらの考察を始めるためには、カントが観念論を論じる際に使用する「観念論」という概念を予め理解しておく必要がある。この意味を明らかにすることから、「観念論論駁」の考察に向けての準備的考察を始めることにしよう。

一般に観念論は物質に対する観念の根源性ないし優位性を強調する説であり、観念が主観を越えた独立存在であると見るか、主観における内在的存在であると見るかで、客観的観念論と主観的観念論の二種に大別される。この種の

分類にしたがうなら、観念 (Idea) の独語訳である広義の表象 (Vorstellung) によって物質の総体としての自然界の法則を説明するカントの立場は、主観的観念論の立場に数えられるであろう。しかしこうした観念論の二分類はカント以降の哲学史家によるものであり、カント自身の用語法とは一応、区別して考えられるべきものである。

カントは観念論の本質的性質を示す語として「観念性 [ideality]」という言葉をしばしば使用しており、この語はカントの使用する観念論の意味を理解する際の手がかりとなる。観念性は実在性の対義語であり、〈非妥当性 [Unzulänglichkeit]〉——実在性は〈妥当性 [Gültigkeit]〉——を意味する。この意味で、カントにとつての観念論とは、われわれの表象の非妥当性についての説——實在論はわれわれの表象の妥当性についての説——となる。〈妥当性〉、〈非妥当性〉という言葉もカント独自のものであるが、それらはわれわれの主観の表象形式、つまり直観形式としては空間と時間、概念形式としては範疇が外的なものに対する存在条件となるか否かを意味する。カントの観念論は、〈空間と時間、あるいは範疇が外的なものの存在条件とならないとする説〉を意味するのである。

## 2. 外物

主観の表象形式が外的なものに対する存在条件とならないとする説がカントの意図する観念論であることは明らかになった。しかしその際に言われる「外的なもの」とは何であろうか。

カントは「観念論駁」において外物をほとんど自明のものとして議論を進めており、特にその意味を説明しようとはしていない。外物についてのわずかな説明が見られるのは、第一版の「誤謬推理」においてである (A 373)<sup>①</sup>。それによると「われわれの外 *auffer uns*」という表現には、

「経験の意味における *im empirischen Sinn*」「われわれの外」と「超越論の意味における *im transcendentalen Sinn*」「われわれの外」の二義ある。前者は空間中にあるという意味であり、われわれの全ての認識の素材はこの意味での外的なものに由来するとされる。後者はわれわれの認識能力の外にあるという意味である。こうしたカントの定義に関しては、H・ハイムゼートも経験の意味における “*auffer uns*” と “*extra nos*” (われわれの外で)、超越論的意味における “*auffer uns*” を “*praeter nos*” (われわれを離れて) というラテン語に言い換える労をとっているように、ドイツ語の “*auffer uns*” という表現には曖昧さがつきま

っている。そこで前者に関してさらに考察すれば、カントは空間と時間を対概念として使用することから、時間中にあるものが経験の意味における内的なものとなる。空間や時間が外官や内官、あるいは外的直観や内的直観の直観形式であるとされるのはこのような事情による。後者に関してさらに言えば、その際の「超越論的」という語は、カントが『純粹理性批判』において提出した彼独自の (ヘア・プリオリで総合的な認識を可能にする認識要素) に対する形容詞ではなく、スコラ哲学以来の伝統的な存在論における絶対的に見られた存在、つまり「存在一般」——“*ens qua ens*” を “*Sein überhaupt*” シュインゲイ “*Ding überhaupt*” と独語訳した Ch・ヴォルフにとっては「物一般」でもある——に対する形容詞である。絶対的に見られた存在ないし物とは他の存在ないし物との関係を度外視して即自的に見られた存在ないし物であり、カント独自の用語法で言えば、しばしばヴォルフ的な意味での存在一般ないし物一般と同一視される物自体 (*Ding an sich*) に他ならない。超越論的意味における外的なものとはわれわれの認識能力を超越したものであり、超越論的意味における内的なものとはわれわれの認識能力の範囲内にあるものである。あるいは、超越論的意味における内的なものはわれわれの認識能力そのもの

であり、われわれそのものに関わるものである。

こうして外物に経験の意味と超越論的意味の二義あることから、外物の存在に関わる観念論にも経験の意味における外物に対する観念論と超越論的意味における外物に対する観念論が存在しうることになった。このような点を踏まえた上で、われわれは『形而上学講義』の「合理的心理学」第一章の議論から考察を始めることにしよう。

## B. 思想的発展

### 1. 絶対的自発性

『形而上学講義』の第三部門「心理学」は、経験との関係において内官を考察する「経験的心理学」と、経験との関係を度外視して内官を考察する「合理的心理学」からなる (XXVIII 222 f=VM 128)。カントは合理的心理学の第一章において、個々の存在物の存在規定である範疇 (カテゴリー的規定 *categoria*) を越えた伝統的な存在論の超越論的規定 (超越論的概念 *transcendentia*, *transcendentalia*) を心に適用する考察を行っている。超越論的規定は「実体性」「単純性」「個別性」「自発性」であり、これらを心に適用して以下の四つの証明がなされる。i. 心は実体である。ii. 心は単純である。iii. 心は個別の実体であ

る。iv. 心は単なる自発的な存在である。これら四つの証明のうち——それぞれの証明を〈第一証明〉〈第二証明〉〈第三証明〉〈第四証明〉と呼ぶなら——〈第四証明〉は他の三つの証明がそこから演繹される原理とも言えるものであり、「合理的心理学」第一章において主要な位置を占めるものである。

「心は単なる自発的な存在である *Die Seele ist simpliciter spontanea agens*」という命題は、どのような事態を表現するのであろうか。カントが第四証明に適用するドイツ語の “*Spontaneität*” は、ラテン語の形容詞 “*spontaneus*” に由来する。“*spontaneus*” はさらに “*spons*” という名詞から語源し、“*spons*” は「自分自身」「自由意志」といった意味をもつ。カントは自発性を「内的原理 *das innere Princip*」に結びつけて考えている。「内的原理」の「内的」とは超越論的意味における内的の意味であり、〈自分の〉——それゆえ「外的原理」の「外的」は〈自分の〉と——という意味になる——ということである。カントは内的原理から生じる自発性に関して、内的原理がそれ以外の外的原理によって条件づけられている (相対的な自発性) と内的原理がいかなる条件の下にもなく、無条件的に内的原理から生じるような「絶対的な自発性 *die absolute*

Spontaneität」の二種を挙げ、後者を厳密な意味の自発性としてゐる。これら二種の自発性のうち、〈第四証明〉の自発性がどちらに相当するかについては、〈第四証明〉の命題における「自発的な」という表現が「単なる」という副詞で修飾されていることから推定できる。「simpliciter spontanea agens」の「simpliciter」の訳語としての日本語「単なる」という言葉は〈不完全性〉といった消極的なニュアンスを多分に含むが、ラテン語の「simpliciter」には、「直接的に」「明らかに」「純粹に」といったニュアンスが含まれている。第四証明における「simpliciter」は、ここで言われる自発性が無媒介的でありかつ明証的な、言い換えれば絶対的な自発性であることを意味しているのである。絶対的なものは超越論的なものであったから、この自発性は「超越論的自発性 die transcendentalen Spontaneität」であるとも言える。心はこの種の自発性である。この点は、心の単なる自発性を単なる自由と言い換えても確認できる。「spontans」には「自分自身」と並んで「自由意志」という意味があつたが、カントも「心は単なる自発的な存在である」という命題を「心は単なる自発的に活動する存在である。すなわち人間の心は超越論的意味における自由である Die Seele ist ein Wesen, welches

simpliciter spontan handelt; d. h. die menschliche Seele ist frei in sensu transcendentali) (XXVIII 267=VM 204) と言ひ換えている。カントは、心が単なる自発性であることを心が絶対的自由であること、言い換えれば、心が超越論的自由であることと考えているのである。

心を絶対的な自発性あるいは絶対的な自由と考えることは内的知覚の知性を強調することであり、内的知覚の自己充足(自足)性ないし無媒介性を強調することである。一七七〇年代後半から一七八〇年頃の前批判期のカントがとるのは、全てを網羅する知性的な内的知覚においては——内的な認識能力を超越するような——超越論的意味における外物がそもそもありえないとする立場であり、批判期には全ての認識の素材を与えるとされる経験的意味における外物の介在が不必要であるとする立場である。そしてこうした内的知覚の絶対的な知性性の立場から、観念論もまた暗黙のうちに論駁されているのである。

## 2. 経験的實在論

『形而上学講義』の「合理的心理学」直後の批判期の思想に相当する『純粹理性批判』第一版の「誤謬推理」は、合理的心理学の批判的考察である。それは「第一誤謬推

理」「第二誤謬推理」「第三誤謬推理」「第四誤謬推理」という四つの誤謬推理を含み、「第一誤謬推理」では心の実体性、「第二誤謬推理」では心の単純性、「第三誤謬推理」では心の人格性（時間における数的同一性）が否定され、それぞれ「合理的心理学」第一章の〈第一証明〉〈第二証明〉〈第三証明〉に正確に対応した議論になっている。しかし「第四誤謬推理」は、〈第四証明〉との対応の見えにくい観念性（外的関係）についての誤謬推理に変更されている。

「第四誤謬推理」が批判する合理的心理学の推論は次のようなものである。i. 与えられた知覚の原因としてのみ推論されるものの現存在 (Dasein) は蓋然的である（大前提）。ii. 全ての外的現象の現存在は直接的には知覚されず、与えられた知覚の原因としてのみ推論される（小前提）。iii. それゆえ外官の全ての対象の現存在は蓋然的である（結論）。「第四誤謬推理」では「合理的心理学」の〈第四証明〉のような内的知覚における自発性や自由は取り上げられない。ここでなされるのは外的知覚の蓋然性に対する批判である。しかし「第四誤謬推理」は確かに〈第四証明〉に対する批判である。なぜなら批判期のカントによれば、内的知覚の直接性ないし知性性を強調する合理的

心理学者は、同時に外物の外的知覚の否定者でもあるからである。内的知覚と外的知覚のうち内的知覚のみを知的直観とすることは内的知覚を第一義的な意味での知覚とすることであり、それは同時に外的知覚を——その確実性において内的知覚に及ばない——第二義的な派生的知覚とすることだからである。内的知覚を第一義的な意味での知覚とし、外的知覚における外物の存在を蓋然視する合理的心理学者の考えを、カントは『純粹理性批判』において「蓋然的観念論 *problematischer Idealismus*」と呼び、その筆頭をデカルトであると考えている。カント自身もまた「誤謬推理」のそれまでの議論において統覚という自己意識の直接性を誤謬推理において認め、自我が実体性や単純性や人格性を備えることを、〈私は思考する *Ich denke (cogito)*〉という統覚の「直接的表現 *ein unmittelbarer Ausdruck*」の様態の一つとして認めている。しかしカントは「純粹理性批判」において、直接的なものが主観の何であるかという点において合理的心理学者と一線を画している。統覚の直接的表現は、直接的であるという意味では合理的心理学者の心に対する見解と変わらないが、それはあくまで直観（認識）ではなく、単なる意識ないし表象にとどまるとするのである。「しかしこの自我は、何らかの対象について

の直観でも概念でもなく、意識の単なる形式である……」(A 382)。自我が実体であったり、単純であったり、人格であったりするというのは、いわゆる〈自己意識の事実〉として認められるに過ぎないのであって、それがいささかも認識されるわけではない。この意味でカントは自らの立場が「超越論的観念論 transcendentaler Idealismus」であるとす。カントによれば、超越論的観念論者は同時に外的に与えられた表象(経験対象)に対する「経験的實在論 empirischer Realismus」者でもある。カントが問題とするのは表象である。そして表象であるという意味では内的表象も外的表象も変わらない。「……〔両者が〕ただ異なるのは、思考する主観としての私の自己の表象は単に内官にのみ関係づけられているのに、拡がりをもつ存在を表示する表象は外官にも関係づけられているという点にある」(A 370 f.)。カントの考えでは、そもそも表象とはわれわれの内(内官中)にあるものであり、われわれの表象には〈内的なもの(内官に関わるもの)〉と〈外的なもの(主として外官に関わるが内官にも関わるもの)〉との区別がある。そしてここから、カントは表象の存在がすでにそれだけで内物と外物の直接的な存在証明になっているとする。「なぜなら両者はともに表象以外の何ものでもない

のであって、この表象の直接的知覚(意識)は同時にその現実性の十分な証明であるから」(A 370 f.)。

しかし外的表象と内的表象の表象としての同一性から経験の意味における外物の観念論を論駁しようとしたカントの議論が不十分なものであることは明白である。なぜなら表象としては同一であっても、内官にのみ関わる内的表象と内官のみならず外官にも関わる外的表象を予め区別した以上、観念論を論駁しうるのは外的表象の存在だけであって、相変わらず内的表象は外物の存在如何についての何の発言権ももたないからである。言い換えれば、「第四誤謬推理」でのカントは、われわれが超越論的意味における外物を知的直観できるという〈第四証明〉の過度に思弁的な立場ではないにせよ、知性的意識の意識内容としての内的表象に関しては、未だに外物を必要としない独立した存在であるかのような見解をとっているのである。このようなカントの傾向は、カントがしばしば使用する内官における表象の〈流れ〉という表現からK・アメリカクスによって“independent stream theory”<sup>③</sup>とも呼ばれるものであるが、外官に対する内官の独立性を強調する“independent stream theory”から観念論を論駁することは不可能である。したがってこの点を修正し自らの経験的實在論を整合的な

ものとするのが、『純粹理性批判』第二版におけるカントの課題となるのである。

### 3. 分析命題

第一版の「誤謬推理」では、『形而上学講義』の「合理的心理学」の第一章に相当する議論として四つの誤謬推理が論じられた。これに対し、第二版の「誤謬推理」では、第一版の四つの誤謬推理に相当する議論が、自己意識と自己認識、あるいは「分析(同一)命題 ein analytischer (identischer) Satz」と「綜合命題 ein synthetischer Satz」の混同を巡る、1から4のアラビア数字を付された議論においてなされている。カントの「4」の議論は、次のような極めて簡潔なものである。

「私は思考する存在としての私自身の実存 [Existenz] を、私の外なる他の物(それには私の身体も属する)から区別するということも同じく一つの分析命題である。なぜなら他の物とは、私が私から区別されたものとして思考する物のことだからである。しかし私自身についてのこうした意識が、私にそれを通じて表象が与えられる私の外なる物なしでも十分可能であるかどうか、それゆえ私が単に思考する存在として(人間で

あることなしに)実存しうるかどうかを、私はこの命題によっては全く知らない。」(B409)

しかしこの簡潔な議論は、その簡潔さゆえにかえってカントの真意を見えにくくしているうらみがある。「4」の誤謬推理は、自我の実存と外物の実存の区別という分析命題と綜合命題との混同である。今、最低限ここで明らかなのは、自我の実存と他物の実存との区別が自我の実存の内すでに含まれるとカントが考えていることである。つまり(私は私の実存を他の物の実存から区別する)という命題が、(私は実存する)という命題から分析的に抽出された分析命題とされていることである。しかし問題は、その分析命題が自己意識(狭義の自己意識)のレヴェルで言われているのか、それとも自己認識(広義の自己認識)のレヴェルで言われているのかである。言い換えれば、カントが批判しているのは、(自己意識にすでに含まれている自他の区別をそのまま自己認識における区別と混同すること)、つまり(自己意識の分析命題)なのか、あるいは(自己認識において初めて成立するはずの自他の区別をあたかも自己意識において成立するように誤解すること)、つまり(自己認識の分析命題)なのか、それともその両方なのかということである。われわれの解釈は、「4」



の議論が自己意識の分析命題と自己認識の分析命題の両方に対応しているというものである。自己意識の分析命題、自己認識の分析命題、それぞれの可能性を探ってみよう。

「4」においてカントは自己意識、つまり「私は思考する」や「私は存在する」、あるいは「私は思考しつつ実存する」(Ich existire denkend (sum cogitans)) という働きが内的原理から生じる純粋に知的な作用であることを認めている。しかし同時に、ここで意識が「私の外なる物」(外官を介して与えられる経験的意味における外物) なしで「十分に可能であるかどうか」「全く知らない」としていても、なぜならたとえ知性的な契機で生じる自己意識といえども、思考内容なしでは生じようがないからである。このことは、カントがここで「人間」という表現を唐突に使用していることから確認できる。カントは「純粋理性批判」のこれまでの議論において「人間」という概念の説明をしていない。『形而上学講義』の定義によれば、「人間」とは内官の対象であると同時に外官の対象でもあるような存在である(XXVIII 224=VM 131)。つまり精神と身体の両方を備えている存在が人間である。カントが「4」の議論の前半部分を「私は思考する存在としての私自身の実存を、私の外なる他の物(それには私の身体も属する)か

ら区別するということも……」とし、「私の外なる他の物」に括弧を付し、密かに「私の身体」を挿入していたのは、こうした後半の議論を生かすための伏線だったのであろう。だとすれば、身体と精神を備えている人間という概念がこの議論に援用されねばならない理由は何か。それは身体が感覚器官の総体だからである(vgl. II 347)。感覚器官とは五感などを含む各種の外官のことである。すでに述べたように、批判期のカントはわれわれの認識内容が全て外官を介して与えられると考えている。外官から思考内容となる全ての表象が与えられるなら、身体を備えない存在に思考作用が生じるかどうかはわからない。したがって外官をもたない「単に思考する存在」が「私は思考しつつ実存する」かどうかに関して、われわれは何一つとして確かなことを知りえないのである。

このような議論により、私が思考する限り、そうした思考作用の発生は外的なものを前提しており、その意味で私と外物との区別を前提することは自己意識のレベルにおいて妥当である。言い換えれば、自己意識の存在からして——超越論の意味における外物については何も言えないにしても——、経験の意味における外物が前提されていることが言えるであろう。しかし同様のことは自己認識

のレヴェルにおいても言えるのであろうか。この点についての「誤謬推理」の議論は極めて簡潔である (vgl. B 299c)。「観念論論駁」がその十分な説明を行っているからである。

## II. 「観念論論駁」<sup>④</sup>

### A. フイヒテの観念論論駁

われわれはすぐさまカントの「観念論論駁」の検討に入る前に、カントの存命中に——カントの「観念論論駁」に關して——J・G・フイヒテが行った観念論論駁の議論を一瞥することしよう。予めフイヒテの議論を理解することは、カントの「観念論論駁」を読む者が陥りがちな誤りを予防し、カント自身の議論を理解する際の助けとなるのである。

G・E・シュルツェ著作の『エネシデムス』に対する書評として一七九四年に『イエーナ一般文芸新聞』に掲載されたフイヒテの『「エネシデムス」論評』は、短いものであるが、フイヒテが彼独自の哲学を初めて公表したものであるとして重要である。ここには、後にフイヒテが「知識学 Wissenschaftslehre」として展開する基本的な枠組みがす

で示唆されている。フイヒテの立場は「たとえカントがこれらをどこにも明確に確立していないにしても、カントの叙述の根底にあるに違いない」<sup>⑤</sup>、カントを継承した批判哲学を自称するものである。ではカントがどの点において「明確に確立していない」ものを「明確に」するのか。フイヒテは、二つの方向からカントの批判哲学をより体系的な形にまとめ上げようとする。まず、i. すでにK・L・ラインホルトによって試みられていたものであり、カントが区別していた心的能力——感性、悟性、理性といった理論的な認識能力内での自発性と受容性の区別、および理論理性と実践理性の区別——を、それらに共通する機能を明らかにすることによって統一しようとする。そして、ii. シュルツェの『エネシデムス』がまさに論駁した、こうしたカントおよびラインホルト哲学が前提する、現象とは区別された物自体の仮定を矛盾ないものにする。

これら二つの課題を克服するために「『エネシデムス』論評」においてフイヒテが提出した定式が、純粋な自我の自己指定(定立)の働きである「事行[*Handlung*]<sup>⑥</sup>」であった。この指定の働きは三段階に展開される。i. 自我が根源的に指定される。ii. 非我が根源的に反指定される。iii. 絶対的自我が相対的自我を自らの内で統一する。われ

われの議論にとつては、iとiiの段階が重要である。iは自我の知的直観の作用である。「絶対的主観つまり自我は、経験的直観によつて与えられるのではなく、知的直観によつて措定される」<sup>⑦</sup>。あるいはより正確には、自我による知的直観の作用と言うより、知的直観の作用こそが自我に他ならない。「……知的直観における自我は、それが存在するがゆえに存在するものであり、それであるところのものであるがゆえに存在するものである。したがつてその限りにおいて知的直観における自我は自分自身を措定しつつ、端的に自立的で独立的である」<sup>⑧</sup>。しかも同時にこの知的直観の自我は、iiの作用でもある。つまり非我を根源的に反措定する作用でもある。「そして絶対的客観、つまり非我は自我に反措定されたものである」<sup>⑨</sup>。「ここにおいて「非我」という言葉でフィヒテが狙いを定めているのは、カントの物自体である。フィヒテは言う。「……物自体は、自我に對置されないような非我であるべき限りにおいて自己矛盾する……」<sup>⑩</sup>。フィヒテによれば、カントやラインホルトが現象の原因として、因果性範疇の適用されないはずの物自体を前提する矛盾に陥つたのは、物自体を自我の能力から超越したものとみなしたという、彼らの出発点にそもその問題があつた。フィヒテの表現で言えば、カントとラ

インホルトは自我に「對置されない」「非我」を前提したことによつて矛盾に陥つたのである。このような考えのもとに、フィヒテはデカルトの蓋然的觀念論を論駁する。

「エネシデムスは、純粹理性批判の第二版二七四頁以下で、觀念論論駁の証明が……デカルトの蓋然的觀念論に對するものであつたことを〔カントの〕明らかな言葉から読み取ることができたであらう。そしてもちろんこの蓋然的觀念論に對しては、思考する自我というデカルト自身が認めている意識は、思考されるべき非我という条件の下でのみ可能であるということが、証明において根本的に明らかにされている。」<sup>⑪</sup>

〈私は思考する、ゆえに私は存在する cogito, ergo sum〉を出発点とするデカルトの蓋然的觀念論は、i. "cogito" の明晰判明な作用の内に "res cogitans" としての "sum" を認め、そこから、ii. 同様の明晰判明な "cogito" の作用によつて "res extensa" としての外物の存在を認める。しかしフィヒテによれば、i の "cogito" は、同時に ii の "res extensa" を反措定する作用であり、"res extensa" なしには "cogito" は生じない。こうして自我の存在のみを確実視し、外物の存在を疑わしいとするデカルトの蓋然的觀念論が論駁されるのである。つまりフィヒテは、

知性的な自己認識（知的直観）が超越論の意味における物を前提（根源的に反措定）しているというタイプの（自己認識の分析命題）によって蓋然的観念論を論駁しているのである。

さてこのようなフィヒテ流の観念論論駁を踏まえた上で、われわれはいよいよカントの「観念論論駁」の考察を始めることにしよう。「観念論論駁」は難解をもつて鳴る議論である。われわれも議論の核心を見逃すことのないよう、まず全体の議論の流れを確認した後にそこに含まれる個々の問題を取り上げ、それらをわれわれの主題に収斂させることにしよう。

### B. カントの「観念論論駁」

議論は「定理」と「証明」、そして証明に付加された三つの「註解」からなる。主要な議論は「定理」と「証明」に尽きている。「定理」と「証明」は次のようなものである。

「定理」「私自身の現存在の単なる、しかし経験的に規定された意識が、私の外なる空間における対象の現存在を証明する。」(B 275)

「証明」「私は私の現存在を時間において規定された

ものとして意識している。全ての時間規定は知覚における何か持続的なものを前提する。「しかしこの持続的なものは私の内なる直観ではありえない。なぜなら私の現存在の全ての規定根拠は私の内において見出されうるが、それらの規定根拠は表象であり、だからそうした表象としては、この表象とは異なった何かある持続的なものを自ら必要とするのであって、この持続的なものとの関係においてあの表象の転変が、したがってあの表象がその内で転変する時間における私の現存在が規定されうるからである。」それゆえこの持続的なものの知覚は私の外なる物を通じてのみ可能であって、私の外なる物の単なる表象を通じては不可能である。したがって時間における私の現存在の規定は、私がそれを私の外において知覚する現実的な物の実存を通じてのみ可能である。さて時間における意識はこうした時間規定の可能性の意識と必然的に結合している。それゆえ時間における意識は、この時間規定の条件としての私の外なる物の実存とも必然的に結合している。すなわち私自身の現存在の意識は、同時に私の外なる他の物の現存在の直接的意識である。」(B 275 f., [ ]内はB XXXIX Anm. からの付加)。

まず「定理」から。これはこれから証明されることであるが、一つだけ重要な表現を指摘しておこう。それは「単なるlob」という表現である。これはすでに確認したラテン語の「単なる simpliciter」という言葉と同じ意味なのであろうか。次に「証明」の議論をできるだけ細く分節化して吟味することしよう。

「私は私の現存在を時間において規定されたものとして意識している。Ich bin mir meines Daseins als in der Zeit bestimmt bewußt.」

これはこれから分析されるべき事実の言明である。「時間において規定されたものとして意識している」とは、私の存在が前後的（継起的）に区切られたものとして（経験的に）意識されていることである。前後的に区切る規定作用は綜合作用であるから、ここで言われる「意識」は広義の意識作用であり、認識作用である。

「全ての時間規定は知覚における何か持続的なものをも前提する。」

これは後の結論に至るための大前提である。「私の現存在」のみならず、全ての時間中にあるもの、つまり表象は常に転変する（前後的に流れる）。ところで転変しているものが転変しているものとして規定されるためには、転変

するものと対比される基体 (substratum) としての「何か持続的なもの etwas Beharrliches」が必要である。カントは「経験の類推」の「第一の類推」において、転変するものの規定は常に転変しないものとの対比においてなされることを明らかにしている。「知覚 Wahrnehmung」は綜合作用を含むわけである。

「しかしこの持続的なものは私の内なる直観ではありえない。なぜなら私の現存在の全ての規定根拠は私の内において見出されうるが、それらの規定根拠は表象であり、だからそうした表象としては、この表象とは異なつた何かある持続的なものを自ら必要とするのであつて、この持続的なものとの関係においてあの表象の転変が、したがつてあの表象がその内で転変する時間における私の現存在が規定されうるからである。」

「私の内なる直観 eine Anschauung in mir」とは、時間における直観の意味である。時間中に存在することは表象として内官に属することであるが、カントによれば内官に持続的なものはない。したがつて時間中にある「私の現存在」を規定するための根拠となる持続的なものは私の内にはありえないことになる。

「それゆえこの持続的なものの知覚は私の外なる物を

通じてのみ可能であつて、私の外なる物の単なる表象を通じては不可能である。したがつて時間における私の現存在の規定は、私がそれを私の外において知覚する現実的な物の実存を通じてのみ可能である。」

「私の内 in mir」に持続的なものがないなら、持続的なものは「私の外 außer mir」にしかないことになる。経験的意味における「私の外」、つまり空間中にしか持続的なものがないというのは、これまたカントの議論の大前提である。そしてこの持続的なものの知覚は、「私の外なる物 ein Ding außer mir」によって可能であつて、「私の外なる物の単なる表象 die bloße Vorstellung eines Dinges außer mir」によつて可能であるわけではないとされる。

こゝで言われる「私の外なる物」については、カントの使用する「私の外」に二義あることから、i. 経験的意味における外物とする解釈、ii. 超越論的意味における外物とする解釈、iii. 経験的意味における外物と超越論的意味における外物が文脈によつて使い分けられているとする解釈がある。iiの解釈は、フィヒテの解釈がそうであつたように「私の外なる物」を一義的に物自体の意味であるとする解釈であり、文献に忠実な解釈者である B. エルトマンなどもとつた解釈である。iiiは「私の外なる物」を、空間中

の物体および物自体という二義的な概念であるとする解釈であり、H・A・ブリチャードなどの解釈である<sup>③</sup>。しかしここでカントは「私の外なる物」を「私の外において知覚する」としているのであるから、これを人間の認識能力の外にある——つまり認識能力を超越する——超越論的意味における外物としての物自体と解することはできない。これは N・ケンプスミスや H・J・ペイトンら多くの解釈者の指摘するように<sup>④</sup>、経験的意味における外物であつて超越論的意味における外物ではない。それは〈空間中にある物〉の意味であり、われわれはこれを、カントが第二版の「純粹悟性概念の超越論的演繹について」においても詳しく述べているように、構想力の形象的綜合 (figürliche Synthesis, synthesis speciosa) によつて、形象として空間中に記述するのである。もしこれを(何か変化するものに対する) 持続性のゆえに実体と言いたいなら、精々のところ「現象的実体 substantia phaenomenon」と考えるべきであり、空間というわれわれの感性的形式にしたがつた空間的実体であると言わねばならない。われわれの感性的形式である空間的なものを「実体」と呼ぶのは問題であるように聞こえるかもしれないが、独立存在ではなく持続的存在を主たる実体概念とするカントの実体観からすれば

(vgl. XXVIII 563=VM 55 f.)、こうした表現は可能なものである。一方、「私の外なる物の単なる表象」という表現は、「外なる」ということで空間的でありながらも、「単なる表象」であることから内官にのみ属するものを意味しており——この点は極めて重要であるが——、(内官にのみ属する空間的なもの)という矛盾した表現である。カントの形象的綜合の説明によれば、例えばわれわれが空間中に時間を表象する場合、われわれは頭の中で時間を線として表象しなければならず、時間は幅をもった線という空間表象(形象)となるのであり、それが単に内官にのみ属する表象であるということはいえない。私の現存在もまた表象として内官に属するのであるなら、規定するためにはそれに対応する表象を形象的綜合によって空間中に記述(構成)するしかないのである。「それらの物を私は私の外において知覚する」というのは、そのような意味である。カントはここで「第四誤謬推理」において自らが行った観念論論駁に含まれていた問題を修正しているのである。ともあれ、こうした「私の外なる物」が「実存」することが、「私の現存在」を規定することになるのである。「現存在」は範疇による存在の規定を示すが、「実存」という表現は、そういうことを度外視して実際に存在することを強調して

いると考えられる。<sup>10)</sup>

「さて時間における意識はこうした時間規定の可能性の意識と必然的に結合している。それゆえ時間における意識は、この時間規定の条件としての私の外なる物の実存とも必然的に結合している。すなわち私自身の現存在の意識は、同時に私の外なる他の物の現存在の直接的意識である。」

「時間における意識」とは、最初に時間において規定されたものとして意識されていた私の現存在のことである。前段階の議論において、私の現存在の規定が「私の外なる物の実存」を規定根拠とすることは明らかにされた。そしてカントはこの事態を、「私自身の現存在の意識は、同時に私の外なる他の物の現存在の直接的意識である *das Bewußtsein meines eigenen Daseins ist zugleich ein unmittelbares Bewußtsein des Daseins anderer Dinge außer mir*」<sup>11)</sup>と言ひ換えている。<sup>12)</sup>ここで先に言われた「私の外なる物 *ein Ding außer mir*」が「私の外なる他の物の *anderer Dinge außer mir*」とされることは、私の現存在の規定が、単に時間における規定であるのみならず、まさに(私の規定であることが強調されているのである。カントが<sup>13)</sup>ここでは「私の現存在 *mein Dasein*」ではなく「私自身の

現存在の *meines eigenen Daseins*』としているのも同様の理由によるのであろう。先には「実存」とされた物の存在が、ここでは「現存在」に変更されていることも偶然ではない。これは、内官中にあるものを空間に記述することが、同時に特定の空間を私以外の対象として規定する働きでもあることを示唆している。私の存在を範疇——現存在の——によって規定する働きが、同時に外なる物の存在を範疇によって規定する働きなのである。これによって私の現存在と物の現存在の規定が同じ意識作用（広義の意識作用）の二つの側面であることが明らかになる。

私の現存在の規定と物の現存在の規定が全く同じ形象的綜合の二つの側面であることによって、今や先の「定理」が確実なものとなる。定理は次のようなものであった。「私自身の現存在の単なる、しかし経験的に規定された意識が、私の外なる空間における対象の現存在を証明する」。「定理」に言われる「私自身の現存在の単なる、しかし経験的に規定された意識 *Das bloße, aber empirisch bestimnte, Bewußtsein meines eigenen Daseins*」つまり経験的な自己認識は形象的綜合の「単なる」一側面であり、それは同時にもう一つの側面「私の外なる空間における対象の現存在 *das Dasein der Gegenstände im Raum außer*

*mir*」つまり経験的な外物認識を必然的に前提しているからである。

以上、『純粹理性批判』第二版の「觀念論論駁」において、カントはかつて自らが「合理的心理学」の〈第四証明〉において認め、第二版の「誤謬推理」でもその傾向を払拭できなかったフイヒテのような知的直観の——知性的な自己認識が超越論的意味における外物を前提するというタイプの〈自己認識の分析命題〉によって蓋然的觀念論を論駁する——立場を否定し、経験的な自己認識がすでに経験的意味における外物を前提するというタイプの〈自己認識の分析命題〉によって蓋然的觀念論を論駁している。「觀念論論駁」において、カントの超越論的觀念論は、外的に与えられた表象（経験対象）に対する経験的實在論として完成されたのである。

註

- ① 以下、カントからの引用に付した括弧内のローマ数字はカデミー版カント全集 (*Kant's gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin, 1902-) の巻数であり、アラビア数字はヤ



の頁数である。ただし慣例に倣い、『純粹理性批判』については第一版をA、第二版をBとしてオリジナル版の頁数を表記した。カント全集に収録された講義録のうち、カント全集が収録するまで慣用されたK・H・L・ネーリッツ編の『形而上学講義』(一八二一年)と重複する箇所については、アカデミー版の巻数と頁数をまず表記した後、ネーリッツ編の『形而上学講義』をVMと略記し、その頁数を併記した。原文を引用する場合も厳密にアカデミー版の表記にしたかった。

- ② Heimsoeth, H., *Transzendente Dialektik—Ein Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, erster Teil: Ideenlehre und Paralogismen, Walter de Gruyter, Berlin, 1966, S. 135. なお『道徳形而上学』(一七九七年)の「法論の形而上学の原理」では、「対象が私の外にあることが表現」が「空間あるいは時間において他の位置にある対象 ein in einer anderen Stelle (positus) im Raum oder in der Zeit befindlicher Gegenstand」と「単に私(主観)から区別された対象 ein nur von mir (dem Subject) unterschiedener Gegenstand」という二義を含むとされる(VI 245)。前者は「誤謬推理」で言われる「経験的意味における」「われわれの外」に相当し、後者は「超越論的意味における」「われわれの外」に相当する定義である。「私(主観)から区別されたもの」という定義は、「誤謬推理」の「われわれの認識能力の外にある」と同意だが、「空間あるいは時間において

他の位置にある」という定義は、「誤謬推理」の「空間中にある」という意味を拡張した定義である。

- ③ Ameriks, K., *Kant's Theory of Mind—An Analysis of the Paralogisms of Pure Reason*, Clarendon Press, Oxford, 1982, p. 249.
- ④ コッからの議論は、筆者による博士学位請求論文「カントにおける認識主観の研究——超越論的主観の生成と構造——」の議論の一部重複する。
- ⑤ *Johann Gottlieb Fichte's sämtliche Werke*, hrsg. von J. H. Fichte, Mayer & Müller, Leipzig, 1845-46, Bd. 1, S. 22 f.
- ⑥ Fichte, *aa.O.*, S. 8.
- ⑦ Fichte, *aa.O.*, S. 10.
- ⑧ Fichte, *aa.O.*, S. 22.
- ⑨ Fichte, *aa.O.*, S. 10.
- ⑩ Fichte, *aa.O.*, S. 20.
- ⑪ Fichte, *aa.O.*, S. 21.
- ⑫ Erdmann, B., *Kant's Criticismus in der ersten und in der zweiten Auflage der Kritik der reinen Vernunft—Eine historische Untersuchung—*, reprographischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1878, Dr. H. A. Gerstenberg, Hildesheim, 1973, S. 201 f.
- ⑬ Prichard, H. A., *Kant's Theory of Knowledge*, Clarendon Press, Oxford, 1909, pp. 322.
- ⑭ 「物」ということば、カントは空間における持続的な現

象的美体 a permanent phenomenal substance in space (substantia phaenomenon) を意味している (Paton, H. J., *Kant's Metaphysic of Experience—A Commentary on the first half of the "Kritik der reinen Vernunft"*, George Allen & Unwin, London/New York, 1936, vol. 2, p. 379)° cf., Kemp Smith, N., *A Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason"*, third edition, Humanities Press, New Jersey, 1984, p. 310, *Ameriks, op. cit.*, p. 122.

⑮ カントは多くの場合、「美存」と「現存在」を区別せず使っている (vgl., B 277, B 157 Anm.)°。しかし「美存」という表現には、現存在にはなく、i. 範疇ではなく存在様式への志向、ii. 変化するものに対する持続的なもの (基体的なもの) への志向が含まれる場合がある (vgl., A 183-B 227)°。

(本学専任講師 西洋哲学)